

# 蒙古襲来にみる時宗の国家危機管理

## Regent Tokimune's National Crisis Management against Mongolian Attacks

杉野 隆 Takashi SUGINO

国士舘大学 21世紀アジア学部

School of Asia 21, Kokushikan University

### 要旨

2回にわたる蒙古襲来の前後の期間に朝貢要請のために元が送った13次の招諭使と北条時宗らの対応をたどり、元、高麗の情勢分析、招諭使への対応、北九州地域における防御態勢の整備など、この期間での関連する対応の変化を分析する。危機管理の原則に照らすと、時宗を、反得宗勢力という内憂と元の攻撃という外患を巧みに乗り越えた危機管理者とする評価には大きな疑問がある。この分析を通して、中世日本人の危機意識、情報感覚を考察し、いくつかの問題点を指摘する。

### 1. はじめに

人間を含めすべての生命体は、意識的ないし無意識的に、リスクに対応した行動をとっている。日本社会は島国にあり、比較的同質な人々で構成され、リスクに対する意識にも大きな相違はない。したがって、さまざまな安全について、基本的には共同体による維持・保障に委ねてしまい、人々は外からの脅威によるリスクにほとんど注意を払う必要性を感じなかった。現代のわれわれは、グローバルな情報流通の中にながらリスク感度は低いといわれるが、ましてや鎌倉時代においてリスク感度は低かったと思われる。国際感覚も同様であったと思われる。例えば、“リスク”なる用語の語源をたどるとき、西欧諸国語間での英語までの変遷がしばしば引用されるが、日本では、明治以降になって初めて登場する<sup>1</sup>。しかし、日本の古代、中世にもリスクが存在したことは言うまでもない。

なぜ蒙古<sup>2</sup>襲来を採り上げるのか？

日本の安全保障の歴史において、特に大きな危機といえば、蒙古襲来と太平洋戦争であろう。しかし、外患と内憂が重複して起きたのは蒙古襲来のみである。蒙古襲来では、2回にわたって自然にも助けられて撃退することができた。太平洋戦争では、戦後に連合軍が日本に駐留し統治したが、7年間で終わっている。もし日本が元の襲来に屈し属国化していたなら、日本という国のかたちは大きく変わっていたことであろう。太平洋戦争については様々に分析されているが、蒙古襲来については、700年以上前のことでもあり、詳細は不明の点が多い。しかし、日本人の危機管理という観点から現在の日本人にも参考になることがあるのではないかという観点から検討する。

### 2. リスクと危機

危機 Crisis とは既に発生した危険事態を、リスク Risk はいまだ発生していない危険(損失)をいう。危機という言葉は、ギリシア語の *Καίρος* (峠, 分岐点) に由来し、病人の生死の分かれ目を意味していた。危機とは、物事がより悪い危険な方向へ向かうか、よい方向へ向かうかの、まさに「分かれ目」を意味している。日本語でも、危険、不安の意味の「危」と、転機、好機の「機」の意味を合わせ持った言葉である。ISO 標準では、従来リスクを悪い方向にのみ解釈していたが、ISO 31000:2009「リスクマネジメント—原則及び指針」において初めて両方向のリスクを扱うようになった。しかし、現在でも多くの場合に悪い方向の意味で使っている。

本稿では国家安全保障における悪い方向のリスクを危機とする。危機管理 Crisis management とは危機に陥らないための予防及び危機対応能力を高めるためのすべての取り組みをいう。危機管理は、キューバ危機をきっかけとして米国を中心に研究がすすめられ、その後軍事部門ばかりでなく、非軍事分野にも応用されている。本稿では、ISO 31000 と ISO 22320:2011「危機管理—危機対応に関する要求事項」を参考して、危機を獲得した価値(組織が守るべき目的, 価値)に対する損害の高い蓋然性と定義する。なお、リスクマネジメントと「危機管理」の概念は明確に分けることは困難であり、本稿でもあいまいに使用している。例えば、ISO 22320:2011 における危機管理とは、Emergency Management の訳語であるが、一般には緊急事態管理と訳すべきであろう。

<sup>1</sup> 明治39年発行の哲学辞彙では Risk, Emergency は扱われず、Crisis には到頭、極處、氣迫という意味がある。

<sup>2</sup> 本稿では、蒙古、元を一般の慣習に従って併用している。

### 3. 蒙古襲来の顛末

#### (1) 文永の役の推移

72(文永9)年35月、元から第6回招諭使趙良弼が来日し、日本の国王並びに大將軍との謁見を要求したが、およそ1年間滞在しても得るところなく帰国した。その結果、フビライは日本侵攻を決意した。

74年10月5日、元・高麗連合軍は、船900隻余り、兵士3万数千の規模で、対馬に現れた。対馬の守護兵を破り、壱岐をひとのみにして博多湾岸に現れた。10月20日早朝に一斉に上陸を開始した。日本軍とは午前10時頃に戦闘が開始された。当初日本軍の士気は頗る高かったが、実際に干戈を交えると、たちまち日本軍は劣勢を余儀なくされた。

戦闘開始の前に鎗矢を射、名乗りをあげるという日本独特の悠長な戦法はまったく通用しない。名乗りを上げるうちに、あたら討ち死にする武士が続出した。武器も元軍の方が上であった。元軍の弓は短弓で一眼威力がなさそうだが、飛距離は和弓の2倍と長く、しかも矢尻に毒を塗ってあるので殺傷力が強い。また、火薬を用いた「てつほう(鉄炮)」は日本軍を仰天させた。まだ火薬を知らなかった日本勢は、「てつほう」が炸裂する時の轟音と閃光に度肝を抜かれ、槍を合わす前から陣中は大混乱をきたした。

かくて日本軍は敗戦に敗戦を重ね、本陣の置かれた管崎方面は完全に敵の占領下となったが、夜には元軍はそろって軍船に引き揚げた。元軍の死者は総勢13,500余人の多きにのぼった。日本の武士たちは善戦しており、元軍も手ごわい相手だと気付いた。しかし、副司令官の劉復亨が重症を負っていることを知り、元軍は軍議を行いいったん高麗に戻ることを決め、博多湾から撤退した。しかし、引き揚げ途中で大風(11月末頃であり台風ではないと考えられる)に遭い、海上の元軍は壊滅的な打撃を蒙った。日本軍は、敵が撤退したことを知って、胸をなでおろした。

#### (2) 弘安の役の戦闘の推移

元は79年に南宋を滅ぼし、中国全土を支配下に収めた。世祖フビライの日本遠征の目的は、文永の役のときの南宋攻略のための封じ込め策(遠交近攻策)から、中華思想に基づく属領化に変わった。そこで、81年正月動員令を發布するにあたり、「ひとの国を取っても、人民を皆殺しにしては土地が用をなさなくなる」と、出征諸兵に訓戒している。

元の日本遠征軍は、元・高麗の兵が主体の東路軍と南宋の兵が主体となる江南軍の二軍で編成された。併せておよそ18万から成る。

両軍は別々に進発し、6月15日に壱岐国(のち平戸に変更)で合流する予定になっていたが、東路・江南両軍が合体できた時は、7月の下旬になっていた。両軍が集結したのは、伊万里湾口の鷹島である。そして、いよいよ本格的な日本攻略戦を展開しようとしていた矢先の閏7月1日の夜に大風が吹き荒れた。その為、元軍は戦う前に大損害を負い、先を争って合浦に逃げ帰った。元軍はこの時の日本軍の残的掃討の犠牲になった者も含め、全軍の7~8割を失ったと言われる。

#### (3) 元軍敗退の真因

元軍の2度にわたる日本遠征失敗の根本原因は、強風や台風という自然現象ではなく、フビライが懸念して出陣のさいに勅のなかで戒めた、「諸将の不和」が複雑にからみあって引きおこされた「人災」であった。日本遠征軍を構成した兵士の大部分は被征服民(高麗国民や南宋国民)であり、彼らには日本を攻める大義名分もなく、意思統一を欠いた烏合の集団であった。しかも、元は海戦を不得意とし、海を渡る輸送手段を被征服民の軍隊に頼らねばならなかった。そこに、日本遠征での無理と大きな脆さを内包しており、元軍は自滅したことになる。

### 4. 元からの招諭使の時系列分析

招諭4とは、「詔(皇帝の命令)を下して諭すこと」(朝貢勸告)を意味する。元は日本に対して盛んに招諭使を遣わし、武力の脅し文句を交えながら朝貢を促した。67年の第1回招諭使から99年最後の招諭使までの期間を文永の役、弘安の役によって三つの時期に分けると、国書の取り扱いと招諭使の対応が前期・後期と中期では対照的であることが分かる(表1)。

<sup>3</sup> 以下、暦年は西暦で、12xx年をxx年と表示する。

<sup>4</sup> フビライは、周辺諸国に対して、名目的な君臣関係(宗属関係)を結ぶための朝貢を促す招諭使を派遣した。中華思想では、「天子」とは「天命を受けて自国一国のみならず近隣の諸国諸民族を支配・教化する使命を帯びた君主」のことをいい、周辺諸国は、中国の徳を慕って皇帝に貢物を献上し、貢物を受けた皇帝は貢物の数倍から数十倍の宝物を下賜する朝貢という貿易形態をとった。フビライは、中国皇帝らしく振舞うことに執着した。

表1 招諭使への対応の経過

区分	前期	中期	後期	計
期間	66-74(8年間)	74-81(7年間)	81-99(18年間)	
来日せず	1	0	2	3
来日／引返	2	0	0	2
来日／黙殺	3	0	3	6
来日／斬首	0	2	0	2
計	6	2	5	13

## 5. 時宗の危機対応

元の執拗な招諭使派遣の真の狙いについて、幕府は、第2回(67年)の時点から日本襲来の可能性を感じていた。第4回(69年)に至って戦闘を確信するに至るが、まだ具体的な対策には着手していない。このときの蒙古国書への回答文案(返書せず)では、「以皇土永号神国、非可以智競、非可以力争」(我が国は神国である。知力でも武力でも争うことは出来ぬ。)と書いてあった。この発想は、太平洋戦争における陸海軍に引き継がれている。神国思想は、国難の時に持ち出される。

時宗が執権であった68年(18歳)から84年(34歳)は、まさに内憂外患が迫っていた。時宗は誠実にこの二つの危機に対応し、そして34歳で燃え尽きたといえる。その戦略は、外患を利用して内憂に処するということであった。寺田寅彦は、「天災と国防」で次のように書いている。

それは兎に角、今度の風害が「所謂非常時」の最後の危機の出現と時を同じうしなかつたのは何よりの仕合せであつたと思ふ。これが戦禍と重なり合つて起つたとしたらその結果はどうかであらうか、想像するだけでも恐ろしいことである。弘安の昔と昭和の今日とでは世の中が一變してゐることを忘れてはならないのである。

ここに、今度の風害とは、昭和9年9月21日に西日本を中心に大きな被害を及ぼした室戸台風が引き起こした近畿地方大風水害のことである。死者76名[1]を出す大被害であった。内憂(関東大震災)と外患(戦争)が重なり合つて起こしたのは、太平洋戦争前のこの時点では、まさに蒙古襲来だけであった。

### (1) 時宗が実際に採った対策

時宗が実際に採った対策を、軍事、宗教、内政の各対策に分類して、時系列に列挙する。本稿最終頁の表2に、各回の招諭使の使者、持参した国書の種類、日本側の対応を各回の招諭使の行動と対応させて示した。

#### ① 前期

[軍事] 幕府は、68年1月18日に初めて招諭使が大宰府に来たことを受けて、直ちに北九州に所領をもつ御家人に対して下向・防禦を命じ、さらに東国御家人がその領地に到着するまで九州定着御家人に肥前・筑前の要害警固を命じた(御教書「異国の防御」)。

[宗教] 朝廷は、伊勢神宮や、国家の重大事、天変地異の時などに特別な奉幣を行う22社に異国降伏を祈願した。幕府は異国警固の態勢を進めたが、朝廷は、それに負けじと、全国神社仏閣で異国降伏祈願を重ねた。

[内政] 御家人所領の売買及び質入れを禁止するとともに、既に売却・質流れした所領を元の領主の領有に戻し、幕府の政治基盤である御家人体制の維持を狙った。時宗にとって、鎌倉の名越時章・教時兄弟と京にいる時宗の庶兄時輔を謀反の嫌疑で殺害し(二月騒動)、指揮系統の統一を図った。

#### ② 中期

この期には、軍事、宗教の面で具体的な対策がうたれたが、国内に閉じた対策である。内政では、異国警固番役と悪党対策に心を砕いた。石築地の構築については元軍も事前に掌握していなかったようであり、東路軍は博多湾での上陸場所を変更している。

[軍事] 九州の御家人および九州に所領をもつ御家人が、九州居住の守護少弐、大友氏らの指揮下に、筑前、長門などの要害に交代勤番し警固に当たった(異国警固番役)。筑前国博多湾沿岸一帯の警備を分担した。博多湾岸に総延長20kmに亘る石築地を築造した。

[宗教] 引き続き、各神社、諸寺に異国(異賊)降伏の祈禱を続ける。

[内政] 幕府は従来の姿勢を大きく修正し、「異国」との戦いに御家人だけでなく、「本所領家一円地の住人」(非御家人)をも動員することを朝廷に承認させるとともに、西国の守護・奉行に西国の諸国

に所領をもつ地頭・御家人を所領に下向させ、翌 75 年から九州および長門の沿岸の恒常的な警備一異国警固番役を実施した。悪党(幕府体制に従わない武士たち、すなわち非御家人のこと)と御家人間の領地争いが激しくなり悪党対策が重要課題となる。

### ③ 後期

高麗征伐計画もあったが実現せず、国内引き締めるための思いつきであった。幕府の政治基盤強化のために内政に目を向けた対策が中心であった。

[軍事] 朝廷は本所領家一円地の住人(非御家人)に対する幕府の動員指揮権を認める。

[宗教] 朝廷による祈祷は以後 40 数年にわたって継続されたという。

[内政] 蒙古襲来を戦った御家人、神社仏閣への論功行賞に腐心し、(弘安)新式目によって政治基盤の強化を図る。悪党禁圧令、鎮西神領興行回復令など。

時宗は、「剛毅果敢」の人と言われている。また、蒙古襲来に対処するためには高度の政策判断が必要であったが、執権時宗と有力御家人である安達泰盛、平頼綱との合議体制を築き、北条一族の反主流派の反目という内憂の中で外患に対処するために、戦争に立ち向かえる態勢を築いていった。会議は、主に時宗の自宅で行われた。態勢づくりの方向性の設定、指導力をどのようにして確立していったか。

参謀は近代以降における軍事システムに生まれた制度である。それ以前には、三国志演義にみられるように、最高責任者の側にあつて軍事に限らず広域的確な助言を与えた者(例えば、諸葛亮)を軍師や指南役と呼んでいた。時宗の場合、渡来僧である夢窓疎石、無学祖元がこれに該当するが、二人は宗教家であり、軍事面ではなく、国政に臨んでの心構えを助言する相談役であった。

しかし、内憂外患に対処するための政策すべての責任を時宗負わせることは公平を欠く。反主流派の反目は鎌倉時代における執権体制の本質に依存するものであったからである。ただ、当時の鎌倉幕府の執行体制を見ると、現代の政治体制に比較して組織化という点で、未熟であり、危機管理を遂行できる体制ではなかった。

## 6. 正宗における危機管理の分析

われわれの受けるリスクには自然リスク、社会リスク、特定リスク、モラルリスクがある[2]。本稿で扱うリスクは社会リスクであり、経済的要因、産業・生活要因(産業廃棄物、生活ごみなど)、安全保障、人身事故などが含まれる。日本人は、昔から、自然リスクの脅威に対処する術を自然に身に付けてきた国民であるといわれる。日本人のリスク観を雄弁に語るものは、地震、雷、火事、親父である。日本人は「天災をいわば運命として甘受する民族」であり、欧米人に比較してリスク対策を積極的に行うことを苦手とした民族であるともいえる。次の 3 点から分析する。

### (1) なぜ、祈祷が重んじられたのか

中世において、戦争には、地上で行われる人間同士の戦いと、天上社会で行われる神同士の戦い「神戦」があり、最終的にはこの神戦が戦局に影響を及ぼすと考えられていた。また、神が人間の戦闘に加勢する場合もあった。異類異形に姿を変えて地上の戦場に現れ、超自然的な力をふるって敵を蹴散らした。「弘安の役」における大風は、神々の化身たちが出現し元の軍船を水没させたと八幡愚童訓に書かれている<sup>5</sup>。神々に神戦を行ってもらうには各寺社で神に戦いを行うよう祈願することが必要であった。

### (2) なぜ、蒙古国書を黙殺したのか

#### ① 神国思想

中国皇帝が他国に送る信書の形式には、皇帝同士の対等の形式、皇帝から国王への見下した形式、国王レベルの対応な形式の三つがある。第 2 回に受け取った国書は皇帝から国王へという形式であった。かつて聖徳太子が隋国皇帝に「日出処天子至書日没処天子無恙」云々と書き、皇帝同士対等の形式を取ったのに照らして、そのような日本国に対して無礼であると判断した。さらに、「蒙古之号于今未聞。尺素無脛初来、寸丹非面僅察。」(蒙古という国号は聞いたことがなく、今回の国書によって僅かに察することが出来る程度である)。朝廷にとって、皇帝とは大宋皇帝のみであり、元は、夷狄蒙古と認識するのみという次第である。神国である日本に対して無礼な信書であり、返書の要なしと判断した。

#### ② 脅しの無視

フビライは、南宋を滅亡させるまでは遠交近攻策をとり日本に朝貢をもとめた。「至用兵、夫孰所好、王其凶之、不宣」(もし武力を用いなければならないようなことになれば、これはもとより好むところで

<sup>5</sup> 7 月晦日の夜半より戌亥の風おびただしく吹きて、閏 7 月 1 日は賊船ことごとく漂蕩して海に沈みぬ。大將軍の船は風の以前に青龍海より頭をさし出し、硫黄の香虚空にみちて、異類異形の物共眼にさえぎりしに、恐れて逃去りぬ。

はない。日本国王よ、よく考えてください)ということである。この間、時宗は返書せず無視することによって、要求を拒否した。第4回に提出された中書省牒状で「それでももし堅固なる地形を頼みにして使者を送ってこないことがあれば、皇帝は怒りを発し、一万艘の船で襲い、たしまし往生を制圧するであろう」と具体的に脅している。結局、日本からは一度も返書していない。

### (3) なぜ、2度にわたって斬首したのか

春秋戦国以来、戦争開始を宣言する使者には不可侵権があるとされる。したがって、使者を斬首することは非礼とされる。しかし、蒙古と高麗の間では、25年に蒙古が高麗に送った使者瓜右与は鴨緑江付近で殺害され、それまで両国間で行われていた朝貢に関する交渉は途絶した。そこで、フビライは31年から6次に及ぶ武力侵入を重ねた末、58年に高麗を降伏させた。時宗は、この事実を知っていたのであろうか。あるいは、招諭使の使者が日本国内を偵察し、その結果を帰国後にフビライに報告することを警戒したのかもしれない。

79年3月に南宋が滅亡し、他の属国に対して元の強さを示すために、日本に対して明確に服属を要求した。これに対して時宗は招諭使を2回にわたって切り捨てることによってフビライの要求を明確に拒絶した。時宗は、日宋貿易商人、渡日僧などからの情報によって、他の周辺国、特に高麗の状況から必ず属国にさせられることを知っていたので、ひたすら戦闘態勢の構築にまい進した。時宗には外交交渉という発想はなかったようである。

## 7. 時宗の情報観

幕府は、元が版図を急拡大しており、高麗が属国となり、南宋も降伏したという情勢を知っていた。その中で、幕府の対応は振り子のように揺れ動いている。

当時、海外情勢の入手ルートの主なものは、朝鮮半島ルート、中国江南ルートであった<sup>6</sup>。いずれのルートも窓口は博多津であり、大宰府が一括管理していた。平氏政権は、博多を中心に宋との貿易や外交に熱心であったが、武家政権になるとあまり関心を向けなくなった。幕府は、大宰府を管理下に置いたが、九州地域の統治機構としての機能に力点を置いた。日本は中国とは国交をひらかず、日宋貿易、日元貿易は民間貿易として頻繁に往来しており、海外情報の国内伝達経路も、これまでの大宰府・諸国→朝廷(太政官)から、大宰府→鎌倉(必要に応じて)→朝廷と長くなった。とはいえ、幕府も朝廷も、これらのルートを利用して自ら情報収集した形跡はない。蒙古襲来の時期には、幕府が対外交渉の前面に立ったが、頼りにした情報源は南宋の渡来僧であった。しかし、彼らは、母国が侵略されていく現実を見ており、その情報は偏ったものであったと思われる。建長寺に残る蘭溪道隆筆時宗諷誦文(願文)の中で、「一箭(矢)を施さずして四海安和し、」と書いており、武器を用いず平穏な日々をもたらすことを理想としていた。これでは、現実的な解決にはならない。

時頼・時宗親子は蘭溪道隆に、時宗は大休正念その後には無学祖元に大きく帰依し、顧問僧としていたが、これはいわば心構え、精神修養だけと思われる。

時宗ばかりか、幕府や朝廷も国際事情に疎かったし、海外リスク感覚は薄かった。例えば、高麗では文臣と武臣の権力争いが続いており、高麗が元に降伏する(58年)と都を防衛する軍隊・三別抄は元への従属を嫌い西南の珍島に立てこもって反乱を起こした(三別抄の乱)。71年9月に三別抄から、救援要請文書である高麗牒状を受け取ったとき、幕府、朝廷は三別抄と高麗国との区別もつかず当惑した。

一方、元軍では、日本遠征の準備を周到に行っていた。そのことは時宗もよく知っていたはずだが、文永の役で高麗軍が壱岐に押し寄せると、対馬守護代は防備の構えがなく全滅した。

## 8. 時宗のリスク観

組織のリスクマネジメント、危機管理においては、組織の目的をまず明確にし、何を守るかを明確化する必要がある。時宗にとって目的は、日本という国家、天皇、鎌倉幕府、得宗家などが考えられる。しかし、鎌倉時代には現代(近代)のような主権国家という観念はなかった。また、御家人たちは、所領知行を安堵してくれる見返りとして(その限りで)幕府に対して忠誠を誓うが、これは愛国心とは異なる。

北条時宗は、「外患を以ってを絶つ」という策を用いて、日本を守ったというよりむしろ、蒙古襲来の危機を「逆用」して、二月騒動などを引き起こして、幕府内の反北条勢力を討ち、朝廷内部の反北条派も一掃して、挙国一致して国難に当たる態勢を固めた。

兵法と言えば孫子が知られているが、日本の実情に合わないことから、日本独自の兵法として、平安

<sup>6</sup> 他に、南島や日本海、さらに北方サハリン經由北海道ルートがあった[4]。朝鮮半島ルートでは、高麗の済州島などでの住民、承認、漁民との接触、高麗への倭賊からの情報もたらされた。中国江南ルートでは、日宋貿易商人が南宋の杭州・寧波での交易を通して入手した元の動向、渡来僧からの南宋の情勢もたらされた。

末期に闘戦経(大江匡房と言われる)が執筆された。しかし、当時大江家は遠ざけられていたので、結果として『孫子』や『呉子』が武家社会の間で普及していたという。元軍内では、文永の役時に優勢勝ちのまま高麗に引き揚げるか否かの軍議を行っている中で、高麗軍司令官である都督使金方慶に対して元軍総司令官である都元帥忽敦は、「孫子の兵法に『小敵の堅は、大敵の擒なり』とあって、少数の兵が力量を顧みずに頑強に戦っても、多数の兵力の前には結局捕虜にしかならないものである。疲弊した兵士を用い、日増しに増える敵軍と相対させるのは、完璧な策とは言えない。撤退すべきである」と話している。

これらは受け身の情報収集であり、幕府自身が積極的に情報収集を行った形跡はない。時代は300年以上下るが、武田信玄は極めて慎重に他国(他州)の情報収集を行っている<sup>7</sup>。元も、招諭使趙良弼は日本に滞在中に、しばしば宿舎を抜け出して実情把握を行い、帰国後その結果をフビライに報告している。まず敵情を知ることが戦略の第一歩であるが、時宗は十分な敵情偵察を行っていない。

時宗は日本最大の危機管理者といわれる[3]。時宗はフビライの脅しに屈したことは一度もなかったが、様々な情報、外患と内憂のリスクの大きさを勘案して脅しを跳ね除けたとも言えない。結果としてうまくいったというに過ぎないのであり、トップクラスの危機管理者とはいえないであろう。時宗のやったことは、国内に閉じた活動であり、敵国あるいはその周辺国に偵察の人を派遣するといった積極的な情報収集活動の形跡は見当たらない。

幕府には対外交渉の組織はなかったことも、海外情報の収集を不十分なものにしたと思われる。元来、外交は朝廷の業務であったが、第4回招諭使に返書を送ろうとした朝廷の判断を拒否したあたりから、外交権も幕府に移っている。しかし、実情は確たる外交理念を持っていたわけではない。一方、元は、隋唐時代からの組織を引き継ぎ、三省六部という政治体制を維持した。その上で、中央政府の中書省に対応させて地方には交渉窓口として行中書省(行省)を設置していた。日本侵攻に当たり高麗にも征東等処行中書省という軍事組織が設置された。外交は六部の中の礼部が担当し、日本への招諭使も礼部侍郎(外務次官)が任じられている。

## 9. まとめ

時宗の危機管理活動は、情報収集、分析の点で不十分であった。その原因は、リスク、特に海外に起因するリスクに対する感度が低かったこと、海外情報収集・分析活動が組織的明確になっていなかったこと、そして、不運なことに、外患と内憂を同時に解決しなければならなかったことである。時宗は、元の日本侵攻を撥ね退けたが、結果として幕府の政治体制は弱体化し、49年後に鎌倉幕府は幕を閉じた。時宗の守るべきものが日本国あるいは天皇であったとすれば目的を達成しているが、得宗家あるいは幕府であったとすれば目的を達成できなかったことになる。いずれにせよ、時宗を日本最大の危機管理者と呼ぶのは褒めすぎであろう。

## 参考文献

(URLは、2013年10月31日に確認)

- [1] 国土交通省 河川整備基本方針>紀ノ川系 紀の川水系流域及び河川の概要 4. 水害と治水事業の沿革 [http://www.mlit.go.jp/river/basic\\_info/jigyo\\_keikaku/gaiyou/seibi/pdf/kino-5-04.pdf](http://www.mlit.go.jp/river/basic_info/jigyo_keikaku/gaiyou/seibi/pdf/kino-5-04.pdf)
- [2] 酒井泰弘 リスク社会を見る目, 岩波書店, 2006年
- [3] 童門冬二 北条時宗の生涯, 三笠書房, 2000年
- [4] 石井正敏 NHK さかのぼり日本史[8]鎌倉「武家外交」の誕生—なぜ、モンゴル帝国に強硬姿勢を貫いたのか, 2013年
- [5] 花井 雄規 武田信玄と甲州法度次第 [http://www.hou1.meijo-u.ac.jp/housei2/semi/zemiron/ゼミ論\(PDF\)/\(花井\)武田信玄と甲州法度次第.pdf](http://www.hou1.meijo-u.ac.jp/housei2/semi/zemiron/ゼミ論(PDF)/(花井)武田信玄と甲州法度次第.pdf)
- [6] 海津一郎 蒙古襲来 対外戦争の社会史, 歴史ライブラリー32, 吉川弘文館 1998年, p.16
- [7] 相田二郎 蒙古襲来の研究 増訂版, 吉川弘文館, 2008年

---

<sup>7</sup> 武田信玄は情報収集を重要視し、「三ツ者」と呼ばれる隠密組織を用いていた。また、身寄りの無い少女達を集めて忍びの術を仕込ませ、表向きは「歩き巫女」として全国に配備し、諜報活動を行わせた。このため、信玄は甲斐に居ながら日本各地の情報を知っていたことから、まるで日本中を廻っていたかのような印象を持たれ「足長坊主」と異称されたという[5]。また、信玄はある情報を入手しても、それを盲信せずに、別の修験者なり密偵なりを用いて情報を裏付けていたという。

表2 招諭使の行動と幕府の対応

回	西暦年月	使節の代表者, 国書, 行動その他	使節, 国書に対する日本側の対応
文永の役以前		幕府の対応は、国書を受理せず、受理しても黙殺	
	65年	高麗人の元朝官吏・趙彝, クビライに高麗に郷導(道案内)させて日本に使者を送ることを勧める	
1	67年1月	正使・黒的, 副使・殷弘。高麗人が案内役 ・国書持参(66年8月付) ・高麗の巨済島まで至るも、渡航は危険と説得され帰国	来日せず引返す
2	67年11月 ～68年5月	高麗の潘阜ら ・蒙古国書(66年8月付), 高麗牒状(67年9月付), 潘阜の書状(68年1月) ・大宰府に到着, 国書を幕府, 朝廷に渡すが, 帰国	受理せず ・幕府, 西国御家人に警戒態勢を命ず ・朝廷, 異国降伏を祈願 ・時宗を執権に就ける
3	69年2月 ～4月	正使・黒的, 副使・殷弘, 高麗使節申思徑, 潘阜ら80人余 ・蒙古国書(内容不詳), 高麗国書を持参 ・大宰府に到着。蒙古国書と高麗国書を少式資能に提出。 ・蒙古使者ら対馬に渡ったが, 高麗で事件発生し, 帰国 ・この時, 二人の日本青年を拉致して元に連行	受理せず ・朝廷は神社に異国降伏の祈願。幕府は, 蒙古襲来の防御に関する御教書。
4	69年8月 ～10月	高麗の金有成と高柔 ・中書省牒状(68年6月付)と高麗国書(69年9月付)と按察使牒状(68年8月付)を持参。 ・対馬で二人の日本青年を返したのち, 大宰府で国書などを提出。	回答せず ・朝廷は中書省宛と按察使宛の返牒を作成したが, 幕府が握りつぶす。返書案に「日本は神国であり, 知力・武力で争う相手ではない」。幕府, 戦を決意
5	71年9月 ～72年1月	正使・趙良弼, 副使・張鐸ら100人余 ・蒙古国書(70年12月付)持参 ・鎌倉直接国書提出を希望するも断念し, 大宰府に写しを渡す。11月中の回答を要求(既に日本侵攻の準備進行中) ・大宰府が仕立てた日本使26人(72年3月に帰国させる)を伴い帰国	黙殺 ・三別抄の状(71年8月)に対しても, 異国の防御のみを指示 [内政]二月騒動, [軍事]異国警固番役
6	72年5月 ～73年5月	正使・趙良弼, 副使・張鐸ら ・高麗国書を大宰府に提出 ・1年余り大宰府に滞在するも, 国書返書を得られないまま帰国 ・フビライ, 日本遠征を正式決定	・黙殺
弘安の役以前		使者を斬首。現代のように外交ルールは確立しておらず、暴挙とは決めつけられない。	
7	75年4月	正使杜世忠, 副使何文著 ・蒙古国書を持参(内容不明) ・同行した水夫4人が79年8月に高麗に逃げ帰り, 国信使一行の最後を国王に報告。国王は直ちに元に報告	斬首 ・杜世忠ら使者と通訳ら5人を鎌倉へ連行 ・必ず元は襲来すると確信 [軍事]異国警固番役, 石築地
8	79年7月	南宋の降将・夏貴, 周福, 欒忠, 日本僧靈果ら(旧南宋の降将・范文虎が送る) ・范文虎の親書持参「大宋国牒状」 ・翌年4月を帰国報告の期限とした ・2回の斬首によって, 日本遠征を決定	斬首 ・親書は鎌倉に送られ書状は無礼と判断 ・全員を大宰府で斬首。 ・12月8日「高麗遠征計画」を発表
弘安の役以後		使者を無視	
9	83年8月	禅僧愚溪如智・王君治国信使 ・台風のため日本に到達せず	来日せず (84年4月4日時宗急死)
時宗死後		使者を受け入れるが、返書なし	
10	84年5月	正使王積翁, 補陀禅寺住持の如智, 愚溪 ・『宣諭日本国詔文』を持参 ・対馬で船員たちの騒乱によって王積翁が殺害され中止	来日せず
11	92年7月	燕公楠, 牒状を日本商人に託す	黙殺
12	92年10月	金有成・郭麟 ・高麗国書を持参 ・耽羅島に漂着した日本人二人を護送し, 帰国せず	黙殺 ・後深草, 牒状の体裁無礼といい, 返牒不可論
13	99年10月	正使禅僧一山一寧, 門人一同, 西潤子曇・石梁仁恭ら。 ・蒙古国書(99年3月付)を持参し, 執権北条貞時に奉呈	黙殺 ・一山一寧高僧ゆえ日本に留め優遇